

< 21世紀の超心理学 >

第10章：ハーディが心物問題に意識の観点から取り組む

クリスティン・ハーディは、意味論場理論を提唱し、心の概念と物の概念を融合させようとしている。そのなかでは意識が重要な役割を担っており、超心理現象もおのずと説明される。

ハーディの説では、心を「経験と遺伝子と文化状況からくる意味論的布置が集まった構造」としてとらえる。この布置の集まりは、ダイナミックにからみあった自己組織化ネットワークであり、超心理現象は、その意味論的ネットワークをつなぎあわせる手段とされる。

進化のうで意識を身に着けた我々は、複雑な情報系である課題解決認知システムにもとづいた「共創造」によって諸問題を解決できるのだ。

(1) 超心理は意味論的水準にある

クリスティン・ハーディによると、超心理現象は、心と物が入り組んだ意味論的水準（ユングのサイコイド＝無意識心の現実）に発生している。物理的事象を、時空を超えた意味の次元がつむぐのだ。

超心理現象は被験者の心理的な要因に左右されるうに、実験者効果に代表されるように、社会的要因にも影響される。また、電磁場のような減衰効果や遮蔽効果が見られないことから、通常の物理場が介在しているとは思われない。

ここでは、意味の近接、頻度、強度、関連などによって特徴づけられる意味論的場が機能しているのだ。解明には意味の究明が肝要なのだが、無意識に埋もれていることが、研究を難しくしているのである。

(2) まず心と物とのギャップを埋めよう

クリスティン・ハーディによると、超心理学が心に関する科学であるとする、何らかの認知理論を基盤にすべきだと主張する。

古典的な認知理論は大きく2つであり、(1) 心とは脳の挙動に他ならないとする唯物論か、(2) それらは別々の存在であるとする心脳二元論である。後者には、心をソフトウェアと考える計算主義、スーペリー (1978) の主張に代表される相互作用論などがある。どれも心と脳(物)の間の関係、その間の深い溝を埋めるには十分でない。

主観的体験の「私」のレベルと、客観的な脳の化学反応のレベルの双方が存在し、相互作用すること、そして心の諸性質が説明できることが必要である。それには新しい理論的枠組みが不可欠である。

(3) ネットワーク力学的創発

クリスティン・ハーディによると、心と脳のギャップを埋めるのは、自己組織化の力学原理だという。

理論的には、神経回路網（ニューラルネット）モデルと、複雑系のカオスモデルを合わせた考え方である。心と脳の2つのシステムが会おうところで、相互にコミュニケーションがなされ、共進化が起きるのである。

(4) 意味論的布置の共進化

人格は複雑な意味論的場であり、つねに生成を繰り返す意味論的布置構成をなしている。たとえば芸術家の布置は、創造的であるとか、風景を楽しむとか、芸術家に典型的な諸々の組織状態からなっている。ある芸術家と別な芸術家はそれぞれ、その典型的な組織状態をもっているので、意味論上の類似布置となり、相互作用を行なう。

その相互作用状態にある2つの系は、一部の意味深い同期によって、全体が複合状態になり、新しい状態が自己組織化される。これはまさに共進化である。

(5) 意味論的場が意志による進化を実現する

人は、目的を達成するために願ったり欲したりして、結果的にそれを実現し、生き抜いている。この仕組みが超心理的にも働いているとするのが、スタンフォードのPMIR理論である。

意味論場理論によると、思考とは意味のネットワークの変化であり、意志とは課題達成に向けたネットワークの駆動力である。シンクロニシティやセレンディピティも同種の現象の現れだ。

この観点から生物進化を考えると、意志をもつことで種の進化が強く促進されていると推定できる。人の進化では、遺伝子の突然変異に帰することができない人類の結びつき、全地球的なガイアの連関が重要な役割を果たしている。意味論的場に注目することで諸問題の解決の方向が見えてくる。

以上 <http://blog.goo.ne.jp/metapsi/>より